

研究代表者村井章介（東京大学）

『8－17世紀の東アジア地域における人・物・情報の交流
—海域と港市の形成、民族・地域間の相互認識を中心に—』上
2004年3月

海域史からみた朝鮮図

高橋公明（名古屋大学）

1. 二つの地図

本報告では、韓国の国史編纂委員会と日本の国立公文書館がそれぞれ所蔵している朝鮮半島を描いた古地図を主たる対象として、海域史の立場から検討するが、具体的な方針を説明する前に、そのような関心に至った経緯を説明しておきたい。

2002年8月末に韓国の国史編纂委員会を訪問する機会があり、その際、李相泰氏から大判の朝鮮図のポスターを紹介された。島の名前がこれまで見てきた朝鮮図と比べて非常に多く記されていること、氏の研究によれば、これの元となる地図は、おそらく15世紀の後半のものと推定されていることに興奮した。帰国後、この地図が国立公文書館所蔵の朝鮮図とほとんど同じ図柄であることを確認した。

その後、国立公文書館所蔵の地図を詳しく検討した研究が戦前からあることを知り（後述）、また、5班の研究会のなかで検討したことの英語の論文のなかでも詳しく紹介されていることも思い出した（Gari Ledyard, 1994年）。さらには、恥の上塗りのような話で、5班のメンバーであるロナルド・トビ氏と橋本雄氏によって、国立公文書館所蔵の地図に関しては見学会——幸いにも私は参加していなかった——も実施されていた。いずれにせよ、朝鮮半島を描いた古地図のなかでも、とくに国立公文書館の地図はかなり有名なものであった。

海域史の立場から古地図を見る場合、さまざまな焦点のあて方があり、濟州島の古地図を対象に検討したときには、地図をどの向きから描いているか、また、濟州島を囲む周辺にどのような地名が書かれているかに注目した（高橋公明、2003年）。ここで検討する地図に関しては、まず島に注目すべきであろう。また、沿岸に書き込まれている港の名称、あるいは所々にある、赤色の舟形のマークも海域史にとって重要な表現となる。ただし、ここでは島についてのみ検討する。

さて、この報告で検討する二つの地図について簡単に紹介しておこう。

韓国の国史編纂委員会が所蔵する地図は絹製で、サイズは91×137cmである。地図自体に名称はなく、通常「朝鮮八道地図」と呼ばれている。この地図を本報告では地図A（写真1）とする。筆者は先に述べたように現物を見ておらず、国史編纂委員会でポスターを見る機会を得て、その後、李相泰氏のご好意により、そのポスターを入手することができた。したがって、この報告でこの地図についての筆者のコメントは、このポスターに基づいたものである。

国立公文書館が所蔵する地図は紙製で、サイズは91×152cmである。漢籍に分類されており、史料の題目は「朝鮮図」で、請求番号は「史199・4」である。地図自体は「朝鮮国絵図」と名づけられている。この地図を本報告では地図B（写真2）とする。こちらについては原史料を見ることができる。

なお、国史編纂委員会・国立公文書館ともにそれぞれ地図A・地図Bから写したと思われる地図を所

蔵しているが、それらについては必要に応じて言及する。

2. 地図の制作時期と地名

地図Aと地図Bについて検討した3つの代表的な研究を取り上げ、明らかになっている点、重要な論点などを確認する。

戦前の研究では青山定雄の研究が代表的である(1939年)。青山は朝鮮半島を描いた古地図のなかから、第1に大谷大学所蔵の「混一疆理歴代国都之図」、第2に図書寮所蔵(宮内庁)の「混一歴代国都疆理之図」、第3に内閣文庫(国立公文書館)所蔵の「朝鮮国絵図」(地図B)を選んで詳細な検討をしている。

地図Bについてのみ青山の貢献を紹介すると、朝鮮の州郡県などの行政上の地名がさまざまな理由で変化することを利用して、地図の年代比定を試みたことである。たとえば、これまで「サクラ県」と呼ばれていたある地域が、1400年に「サクラ州」になり、さらに1450年に再び「サクラ県」になったことが明らかとする。そして、これまで「キク州」と呼ばれていた別の地域が、1430年に「キク県」になり、さらに1480年に再び「キク州」になったとする。このとき地図上に「サクラ州」と「キク県」があれば、この地図は1430年から50年の間に作成された、あるいはその時期を描いたものと推定する方法である。

詳細は省くが、この方法を駆使して、この地図が世宗の治世に作成され、中宗の治世において改訂されたものと結論づけている。考証においては、いくつもの事項を検討しながら総括をしていないため、明確ではないが、報告者が見たところ、1435年(世宗17)から1438年(世宗20)ごろに原図が制作され、それに基づいて1512年(中宗7)から1549年(明宗4)まで、あるいは1567年(明宗22)から公海君の治世(1608-23年)までのどちらかで現存する地図に改訂されたと推定している。

地名の変遷に焦点をあわせて年代比定をする青山の方法は、この地図を素材にしたこれ以後の研究でも踏襲されるようになる。ただし、焦点をあわせる地名が筆者ごとに微妙に異なり、制作年代に関する結論はそれぞれ異なる。また、青山は「今日の所謂歴史地図とは多少相違し殆んど現在を主とした地図と云つても差支へない程のものである」と、この地図の同時代性を強調しているが、地名のありかたが、年代比定を一義的に決定できる内容ではなかったため、まず原図を想定し、ついで後世に改訂されたものと結論づけた。

現存する古地図のほとんどが、オリジナルとコピーというような分類では整理できず、いくつもの先行する複数の地図の再構成によって成立しているという「事実」を直視すれば、青山の想定は妥当で、さらにいくつもの時代の表現が地図Bのなかにあるかもしれないという見方が必要であろう。意識的ではないが、一般的に地図テキストは複数の言説を含んでいるという立場で検討している報告者にとって、きわめて有益な研究である。

ついで長正統の検討を紹介する(1982年)。1980年、対馬島の蕃建(しげたて)家に伝来していた朝鮮古地図が九州大学に入ることになり、「朝鮮八道地図」として所蔵することになった。この地図が地図Bの類本ということが、長にとっては、この検討をする大きな動機となったようである。ただし、検討のほとんどは地図Bについてであり、青山の研究を批判しつつ、より精密な地図制作年代の比定を試みている。

長の地図Bに対する貢献として、まず挙げなければならないのは、この地図が基本的に朝鮮本国と鴨緑江・豆満江以北の部分がそれぞれ別の典拠から写され、再構成されたものと想定して検討したこと

ある。そこで、鴨緑江・豆満江以北が嘉靖16年刊以前の『遼東志』の附図を典拠にしたものではないかと推定した。

朝鮮本国部分については青山の所説をまず問題にした。青山に対する主要な批判は、世宗の治世に原図が作成されたのではないかという推定に対して向けられている。15世紀の地名を反映している根拠をことごとく否定し、1513年(中宗8)から1539年(中宗34)までの間に作成されたとし、地図Bの「もととなった特定の原図の存在などを証明することはできない」と結論づけた。もちろん、これは原図の存在自体を否定したものではなく、地図Bの内容からはそこまで推定できないという実証的な姿勢を主張したものである。ただし、事実上、青山の解釈が暗示的にもっていた地図のとらえかた、すなわち、複数の時代背景を持つ表現が地図テキストに並存しているという考え方を否定したものとなっている。

李相泰は、1999年に刊行した『韓国古地図発達史』の表紙に地図Aを使いながら、朝鮮前期の朝鮮半島図でもっとも詳しく検討したのは、同じく国史編纂委員会所蔵で1557年に制作された「朝鮮方域図」(国宝248号)であった。地図Aに関しては、なぜか本文のなかでは簡単に紹介しただけであった。おそらく重要性を感じながらも、さらに検討する必要を感じていたのであろう。

翌2000年、地図Aを本格的に検討した最初の研究と思われる専論を発表した。李相泰もこれまでの研究と同様に、やはり地名の変遷に注目して検討し、1469年(睿宗1年)から1481年(成宗12年)の間に制作されたと結論づけた。また、16世紀にならなければ見ることのない地名についても、それ以前から慣習的に使用されていた可能性に言及し、結論に影響を与えていない。

地図Bを検討した前の二つの研究と制作時期に大きな差があることをどのように考えたら良いのだろうか。テキストが異なっており、このような結論が出されても不思議ではないように思えるが、実際に地図Aによって確認すると、地図Bを検討した前2者が、16世紀に制作された根拠として指摘した地名は、やはり地図Aでも確認できる。したがって、地図Aといえども15世紀の制作とするにはやや無理があるようである。ただし、地図テキストが複数の時代のあり方を反映するという見方に立てば、李相泰が地図Aのなかから15世紀後半の言説を指摘したというように解釈することができる。

以上、3つの研究から引き出しうることは、相互に矛盾した指摘もあり、簡単ではないが、報告者の立場から、つぎのように要約する。地図Aと地図Bは複数の時代のあり方、少なくとも15世紀前半と後半のあり方を描いており、かつ現存する地図は、16世紀の前半に制作されたものである。

3. 地図Aと地図B

ここでは、二つの地図が伝来した経緯と両者の関係について検討する。

地図Aについて、もっとも重要な記述は、李相泰の著書(1999年)48頁に掲載されている挿図4で、1923年の栢原昌三が実施した対馬島史料採訪についての復命書である。

朝鮮古図 一軸 対馬 宗伯爵家蔵

時代未詳、或北茂山流域ノ、未ダ朝鮮領土ニ明記サレザルヲ見レバ、肅宗王時代(西紀一六七五年)以前ノモノナルヲ知ラン満洲方面ノ紀事ハ上古ノ地名アリ、種族名アリ、中古ノモノアリ、近代ノモノアリ、ソノ新シキハ明ノ成化(四六五)即チ世祖王代を下ラス、コレ以テ図繪ノ年代ヲ揣摩シ得ベキナリ。舊、紅葉山文庫(徳川幕府)ニ同一本ヲ蔵ス、蓋シ対馬ヨリ献上セシモノニテ、コノ地図ハ即チ原本ナルベシ

李相泰は、この復命書の「朝鮮古図」を先に述べた「朝鮮方域之図」と解釈した。確かに、これも絹本ではあるが、「満洲方面ノ紀事ハ上古ノ地名アリ、種族名アリ、中古ノモノアリ、近代ノモノアリ、ソノ新シキハ明ノ成化（四六五）即チ世祖王代を下ラス」とあるにもかかわらず、「朝鮮方域之図」にはほとんど「満洲方面」について記述は見られない。おそらく現在なら、李相泰は「朝鮮古図」を国史編纂委員会所蔵で図書番号「貴34」の「朝鮮全図」、すなわち地図Aであるという解釈に賛成してくれると思う。

また、この記述には「舊、紅葉山文庫（徳川幕府）ニ同一本ヲ蔵ス、蓋シ対馬ヨリ献上セシモノニテ、コノ地図ハ即チ原本ナルベシ」という、地図Aから地図Bが作成されたという重要な推定がなされている。

長も先に紹介した研究のなかで、地図Aの伝来について貴重な証言を中村栄孝から引きだしている（1982年）。1980年12月4日になされた中村栄孝へのインタビューによれば、地図Aは朝鮮史編修会の前身にあたる機関が対馬島の宗家から借り入れたものであること、東京大学史料編纂所からこの機関に赴任した栢原氏が責任者となり、死去される前年の秋（1923年＝大正12年）に対馬島での採訪が実施されたこと、そして、この地図は絹本で一本だけであったことなどが確認されている。

地図Aは1923年に栢原氏の責任において、まず宗家から借り入れら、いつのまにか朝鮮史編修会にそのまま所蔵され、敗戦後、国史編纂委員会の所蔵となったのであろう。なお、『朝鮮古地図展覧目録』という、1932年に京城帝国大学で行なわれた朝鮮古地図の展示のカタログを長氏は引用され、遅くともこの時期以前に地図Aは朝鮮史編修会に所有権が移転されたのではないかと推定されているが、これについては、以下の理由で再検討する必要がある。

このカタログによれば、地図名「朝鮮絵図」のところに「朝鮮編修会蔵」とあり、確かに説明文は地図Aの内容に合致する。ところが、細かく見ていくと、まずこの地図が「写」とあるだけで、どこにも絹本という記述はないこと、サイズについては93.5×142cmとあり、地図Aのサイズ91×137cmとかなり異なること、説明文のなかにも「本図は、朝鮮役に際して対馬の宗氏より豊臣秀吉より提出せる朝鮮絵図の副本として伝来し、宗家に襲蔵せられたるものなり」、あるいは「本図は恐らく李朝の初期に於て頻繁なりし交通の間に、朝鮮より対馬に入れる朝鮮地図に拠りて描かれたるものなるべし」などとあり、朝鮮製ではなく、対馬島で複製された地図であることが明らかのように解説されている。これはどういうことであろうか。

実は、李相泰氏の尽力で入手することのできた朝鮮古図のポスターは3枚あり、そのうち2枚は地図Aを2種類の色調で撮影したもので、残りの1枚は別の朝鮮古図である。この地図の構図は地図Aとほぼ同じで、地図Aからの写しといっても問題はない（写真3）。また、写真から見る限り紙製である。そして一瞥で朝鮮製でないと見える特徴がある。それは対馬島がないということである。朝鮮の領域を描いた朝鮮製の古図のほとんどが対馬島を構図に含むことは有名な特徴で、対馬島がない朝鮮図は朝鮮製ではない可能性がきわめて高いのである（高橋公明、2001年）。

したがって、ほぼ間違いなく言えるのは、この地図が対馬島で作成されたものだという点である。そして、それは何らかの手続きによって、遅くとも1932年には朝鮮史編修会の所有になったということである。ということは、地図Aは、1923年に朝鮮史編修会に借り上げられたが、明確な所有権移転の手続きもふまずに、そのまま敗戦となり、国史編纂委員会の所蔵になり、現在に至っているということではないだろうか。これは、中村栄孝の「それ以前の栢原氏の対馬採訪のことは恐らく今となっては記録などないであろう」（長、1982年）とも対応する。

なお、長はこの地図を国史編纂委員会本として紹介している。このこと自体は間違いではないが、検

討するなかで、地図Aに関する考察とこの写しに関する考察が混在し、かつ、それらをひとつの地図として検討しているため、混乱が見られるのである。少なくとも、1923年の栢原氏の対馬島における史料調査に関する記述は、基本的に地図Aのことであり、『朝鮮古地図展覧目録』の「朝鮮絵図」は対馬島で複製されたコピーのことである。

なお、李相泰の著作に収録されている地図の写真によって、地図Aが国史編纂委員会所蔵の図書番号「貴34」の「朝鮮全図」であることはすでに述べたが、対馬島製の古地図も同じく写真によって、図書番号「貴35」の「朝鮮地図」であることも確認できる。

つぎに地図Bについて検討するが、これについては国立公文書館で原物を確認できるので、それに基づいて整理する。先に紹介したように、地図Bは紙製で彩色、サイズは91×152cmである。漢籍に分類されており、史料の題目は「朝鮮図」で、請求番号は「史199・4」である。形態には以下の特徴がある。紙は3枚が使われており、継ぎ目は上から60cm弱と下から36cmあたりにあり、折り目は縦3本、横4本である。所蔵の経緯をもっとも明確に示すのは、地図Bの左上と左下にある「秘閣図書之章」(3行)の同文異種の印影である。上が1879年(明治12)、下が1872年(明治5)に彫られたもので、いずれも将軍家の紅葉山文庫から移管された本に明治維新後に捺されたものである。したがって、地図Bは近世のある時期に宗家から将軍家に献上されたものということが言える。

なお国立公文書館は、地図Bをさらに忠実に写した地図を所蔵している。題目は「朝鮮国図」で、請求番号「178・449」である。地図Bについて、長は「この地図は、対馬の宗家からの献上などという形で昌平齋へ入ったものではなさそうである」と推定しているが、この地図に捺された印章についての記述から判断すると、地図Bではなく、なんらかの手違いによって、この写しに基づいて検討していることがわかる。印章のあり方からして、江戸幕府内で写されたものかもしれない。

以上のように、地図Bは宗家から将軍家へ献上されたものと考えて間違いないが、作成時期についてこれまで指摘されてこなかったことを追加しておきたい。この報告の準備をする過程で、5班のなかで研究会が行なわれ、地図Aと地図Bを紹介する機会があった。そこでいくつかの貴重なコメントをいただいたが、そのなかで、荒野泰典・鶴田啓などから、地図Bの「富山浦」の南に「館」と書いてあるという指摘を得た。「館」のまわりは赤く囲ってあり、きわめて境界性の強い表示がなされている。地図Bのなかでは赤線は交通路の表示として用いられており、このように赤く排他的に囲ってあるところは他にない。もちろん、齋浦とか塩浦にもこのような表示はない。もちろん、地図Aには「館」の表示はない。したがって、この「館」は釜山の倭館を表したものと考えられ、地図Bの作成時期は近世としなければならない。これ以上、詮索してもあまり意味はないが、「富山浦」から明確に南に位置したところに「館」はあり、近世の倭館として定着した草梁倭館の時代(1678年以降)に描かれたものと推定しておきたい(鶴田啓、2003年)。

以上の検討で得られた結果を総合すると、地図Aは16世紀前半に朝鮮で作成され、ある時期、遅くとも豊臣秀吉の朝鮮侵略の始まる前に対馬島の宗家が入手していたと考えられる。その後、さまざまな写しが作成された。「館」がないということに注目して、おそらく近世以前に対馬島を消して写したものが地図Aとともに最終的に国史編纂委員会に所蔵され、近世になって作成された精密な写しが地図Bとなり、将軍家に献上され、さらに幕府内部でその写しが作成されたのであろう。対馬島がないタイプは、長が紹介しているように九州大学文学部も所蔵している。おそらく、調査を実施すれば、日本各地でのタイプの地図はまだ見つかる可能性はある。これもまた、長がすでに紹介しているが、近代になってもこの傾向は少し続く。国立公文書館には請求番号「177・211」の「朝鮮八道図」があり、この地図右上には丸い朱印が捺されており、「在清国日本公使館所蔵記」とある。この地図には対馬島は描か

れていないが、基本的に地図Aの系統であることは明確に判定できる。

4. 地図Aに見える島の名称と『新增東国輿地勝覽』掲載の島名

ここでは、地図Aに見える島の名称を網羅するとともに、『朝鮮王朝実録』の「世宗地理志」や『新增東国輿地勝覽』など地誌のなかに見られる島名と比較し、全体像を把握するための基礎的な作業を行なう。表1は地図Aに記述された島名の一覧である。海に道境は描かれておらず、道界上に位置する島については便宜的に分類し、地志で確認できる場合はそれにしたがつた。

表1 地図Aに見える島の名称（地図Bも参照）

道名	島名	備考
咸鏡道 41島	黒蕪島。白蕪島。仍邑富島（以上3島は地図Bにより校訂）。白島。熊島。檜島（以上6島は定平江周辺）。これより豆満江河口および以南。*鹿島。卯島。赤島。大草牧。小草牧。松島。加次。假山。加次。椴島。卯島。卯島。加次島。小島。大島。*馬即耳牧場。懸島。松島。達島。松島。陳島。薪。松島。阿里。仇非。鞍島。芽島。薪島。松島。井島。青島。?島。女島。國島。猪島。	おおむね、海岸沿いを北から南へ。
江原道 9島	穿島。厚島。兄島。弟島。竹島。草島。竹山。于（少し違う）山島。蔚陵島。	同前。三陟浦、蔚珍浦に舟印。
慶尚道 42島	丑山。鳥島。竹島。霜島。豆毛浦。冬栢島。絶影島。大島。*七點山。竹島。鳴音島。加徳島。*巨濟。緒島。緒島。漆川。加个島。見个島。*朱源島。*閑山牧。外助介島。金梁島。外毎々卵島。内毎々卵島。加个。山瀨。大佐里。小佐里。小知島。竜草島。飛盖島。楸島。国正島。加肯。草島。仇个島。*蛇梁。*南海。酒島。蓮花島。虎島。欲知島。	多大浦までは海岸沿いを北から南へ。以降は東から西へ。巨濟島からは北から時計回り。観魚台、鳥島、?浦、水営、西生浦、絶影島、齊浦、莞浦、永登浦、緒島、知世浦、朱源島、海平場、蛇梁に舟印。
全羅道 129島	平島。人中島。老大島。*吹个島。小横看島。鉢大介。豆里。安島。大横。*雲龍島。酒里島。構竹島。巨大島。召山島。角石島。愁楽島。海介島。外介島。其大伊島。丹屏島。大島。所音島。尔山島。馬島。暗川島。鹿島。大伊母。大即。草島。竹島。鞍島。来徳島。助楽島。穿島。*兪山島。古尔。馬島。達島。*莞島。横看。丘島。知島。甘勿乃里。沙月串。長佐。草蘭島。楸子島。愁徳島。知道島。*珍島。*濟州。牛島。楊島。竹島。月浦。毛瑟浦。塞達。金路。岩島。松島。新伊尔島。加士島。小中開。智力島。両頭鶴。阿大島。道草。加魚。中開。*長山牧。安昌。汝溪之。其作只。玉山島。愁風島。汝置島。披錦。水中開。加次。萬億佐島。*黒山島。*押海島。*慈恩島。*大花島。*西草島。*梅加島。加个島。毛也。送島。栗島。草内。臨溜島。掛吉島。披錦島。知島別望。*山知島。水島。陳人島。大垂島。沙島。小加氏。七山島。臨炳島。大加氏。*安馬島。*寒洛島。岩島。大丘。大父島。小鳥（オカヘン）。八声島。掲島。隔島。*末島。*丹島。冬栢。長華。阿春島。横看島。拝島。望知島。望知島（ふたつ）。*木島。麻介島。楮島。其良島。無衣个島。加个項島。阿士个島。	東から西へ。濟州島以降は南から北へ。水営の両側、召山島、高興、會写浦、馬梁、達梁、水営、每臨、法聖浦、興徳、鋪浦、に舟印。

忠清道 29島	竹島。開也召。法島。少音島。*馬梁。夫乙七島。麻介島。金浦島。金叱音島。*高島（うえに赤）。桂風。加文。安沙竹島。弟島。兄島。隔音島。个致島。*葛島。加外島。万伊太羅。屈鴨島。茫島。爵島。瓮島。上草島。下草島（地図Bで校訂）。積岾。立岐。仙俠島。	南から北へ。水營の両側、波沼渡に舟印。
京畿道 16島	大部島。小部島。雲奥島。水深島。禿俠島。信島。濟?島。三水島。旡衣島。虎島。巴音。?島。珎法。令音北島。沙島。松蒙。	同前。広徳、花梁、江華、喬桐に舟印。
黄海道 9島	延平島。茄乙浦。延威島。魚化島。飛斤鴨島。大青。小青。沙乙外。*白朝島。	同前。瓮津、長淵に舟印。
平安道 20島	雉島。虎島。許沙。召个邑。?島。召个。召个。大島。小島。言伊島。鵲島。大和島。庫島。*身尾島。仰个島。加次島。多士島。知利島。蘆島。薪島。	同前。

*印の島は他の島々のように緑色の着色なく、比較的大きい。

以上、地図Aに見られる島名を『朝鮮王朝実録』「世宗地理志」（巻148—巻155）と『新增東国輿地勝覧』のなかで挙げられている島名と対照してみよう。なお、あまりにも煩瑣にわたるので対照する史料の島名の一覧は省略する。

まず地図Aの咸鏡道41島と「世宗地理志」の咸吉道25島を対照する。両者に共通するのは10島である。「熊島」が両者に見られるが、前者が先に述べたように朝鮮の領域の外に、後者が比較的この道の南にそれぞれ位置しており、ここでは除外した。41分の10と25分の10が、それぞれ共通する島名の比率である。

江原道では、地図Aの9島と「世宗地理志」の2島を対照する。両者に共通するのは2島である。厳密には鬱陵島と于山島と考えられる島名の漢字はそれぞれ異なるが、これらについては、いくつもの変異があり、大きく見て共通と解釈した。もちろん、両島の表記を検討する場合には異なる表現とすべきである。9分の2と2分の2が、それぞれ共通する島名の比率である。

慶尚道では、地図Aの42島と「世宗地理志」の15島を対照する。両者に共通するのは7島である。42分の7と15分の7が、それぞれ共通する島名の比率である。

全羅道では、地図Aの129島と「世宗地理志」の41島を対照する。両者に共通するのは13島である。このなかには前者の「披錦島」と後者の「被錦島」、前者の「助楽島」と後者の「助薬島」を類似の字のため、前者の「楸子島」と後者の「舟子島」を同音のため、共通とした。129分の13と41分の13が、それぞれ共通する島名の比率である。

忠清道では、地図Aの29島と「世宗地理志」の1島を対照する。両者に共通するのは0島である。29分の0と1分の0が、それぞれ共通する島名の比率である。

京畿道では、地図Aの16島と「世宗地理志」の28島を対照する。両者に共通するのは5島である。16分の5と28分の5が、それぞれ共通する島名の比率である。

黄海道では、地図Aの9島と「世宗地理志」の23島を対照する。両者に共通するのは7島である。9分の7と23分の7が、それぞれ共通する島名の比率である。

平安道では、地図Aの20島と「世宗地理志」の5島を対照する。両者に共通するのは1島である。20分の1と5分の1が、それぞれ共通する島名の比率である。

全体として、両者が共通の情報から、あるいは一方から他方へ写されたということは言えないようである。島数にしても、前者が多いところとして咸鏡道、江原道、慶尚道、全羅道、忠清道、平安道が、

逆に後者が多いところとして京畿道と黄海道がある。この1点でも両者が共通の情報源から得たものではないことは明らかである。また、あえて言えば、黄海道に関する共通の島名の比率は高いが、それ以外は到底そのようには言えない。

つぎに同様に、地図Aと『新增東国輿地勝覧』を対照してみよう。

咸鏡道では、地図Aの41島と『新增東国輿地勝覧』の30島を対照する。両者に共通するのは13島である。ここでも「世宗地理志」と同様に熊島が両者に見られるが、同じ理由で除外した。41分の13と30分の13が、それぞれ共通する島名の比率である。

江原道では、地図Aの9島と『新增東国輿地勝覧』の16島を対照する。両者に共通するのは5島である。ここでも厳密には鬱陵島と于山島と考えられる島名の漢字はそれぞれ異なるが、これらについては、いくつもの変異があり、大きく見て共通と解釈した。9分の5と16分の5が、それぞれ共通する島名の比率である。

慶尚道では、地図Aの42島と『新增東国輿地勝覧』の74島を対照する。両者に共通するのは13島である。前者の「鳴音島」と後者の「鳴旨島」は厳密に見れば異なるが、字形が似ており、写す過程で変化した可能性もあるため、共通の島名とした。また、前者の「酒島」と後者の「大酒島」「小酒島」は同じ場所を指していると考えられるので共通の島名として1島を加えた。42分の13と74分の13が、それぞれ共通する島名の比率である。

全羅道では、地図Aの129島と『新增東国輿地勝覧』の278島を対照する。両者に共通するのは29島である。前者の「助楽島」「智力島」「長山牧」「其作只」と後者の「助菓島」「智島」「長山島」「餘作只島」は字形がそれぞれ似ており、共通の島名とした。また、前者の「汝置島」「披錦島」「押海島」「加个島」「横看島」「望知島」と後者の「汝致島」「飛今」「圧海島」「可佳島」「横建島」「望地島」はそれぞれ同音あるいは類似音なので共通の島名とした。129分の29と278分の29が、それぞれ共通する島名の比率である。

忠清道では、地図Aの29島と『新增東国輿地勝覧』の43島を対照する。両者に共通するのは6島である。前者の「万伊太羅」と後者の「方伊羅島」は字形が似ており、共通の島名とした。29分の6と43分の6が、それぞれ共通する島名の比率である。

京畿道では、地図Aの16島と『新增東国輿地勝覧』の61島を対照する。両者に共通するのは6島である。前者の「済?島」「三水島」「珎法」と後者の「済扶島」「三木島」「彌法島」は字形がそれぞれ似ており、共通の島名とした。16分の6と61分の6が、それぞれ共通する島名の比率である。

黄海道では、地図Aの9島と『新增東国輿地勝覧』の29島を対照する。両者に共通するのは5島である。前者の「白朝島」と後者の「白翎島」は字形がそれぞれ似ており、共通の島名とした。9分の5と29分の5が、それぞれ共通する島名の比率である。

平安道では、地図Aの20島と『新增東国輿地勝覧』の37島を対照する。両者に共通するのは4島である。前者の「加次島」と後者の「加次里島」は字形がそれぞれ似ており、共通の島名とした。20分の4と37分の4が、それぞれ共通する島名の比率である。

地図Aとの島についての情報を要約してみよう。島数について言えば、咸鏡道以外はいずれも後者の方が多し。もちろん、咸鏡道について地図Aのほうが『新增東国輿地勝覧』より情報が多いということは注目すべき結果である。また、先に検討した「世宗地理志」よりも『新增東国輿地勝覧』のほうが、はるかに多くの島に関する情報をもっていると言える。いずれにしても、両者が共通の情報から、あるいは一方から他方へ写されたということは言えないようである。

5. 咸鏡道の島々

地図Aのなかの島々についての情報のありかたを総括してみよう。第1に、「世宗地理史」との比較において、京畿道と黄海道を除く6道で地図Aの島数のほうが多く、第2に、さすがに『新增東国輿地勝覧』では数的には圧倒されるが、咸鏡道では地図Aのほうがしのぎ、第3に、地誌との共通項が少ないという3点が指摘できる。

以上の特徴について、もう少し具体的に、この地図が何を語っているか検討してみよう。まず、島々を多く描き、さらに島名を付したことについて、他の朝鮮半島を中心にした地図との比較が可能である。まず、先にも言及した国宝248号の「朝鮮方域之図」を見てみると、構図の驚くほどの共通性にまず眼が行く。そして、色彩は薄いながらも確実に島々は多く描かれていることがわかる。ところが、島名として数えることができるのは済州島と対馬島だけである。おそらく、地図Aあるいは、それと同系統にある地図をモデルにしたと推定できるが、島への関心の低下は明確である。

朝鮮関係の古地図を収めた地図集で朝鮮半島を中心にした地図を見ても、例えば、『新增東国輿地勝覧』の附図として作成された『東覧図』のなかの「八道総図」（1530年）には11島の島とその名前しか書かれていない（李燦、1991年）。地誌の記述を補うという意味では仕方がないことかもしれないが、島への関心の低さは否定できない。これ以外にも数多くの朝鮮図が収録されており、それらのほとんどは朝鮮後期の作品だが、島に関する描写については同じようなことが言えるのである。島そのものの描写がないか、あっても島名はつけられていないのである。なかには、李相泰の著作に収録されている地図のいくつかは、例外的に地図Aと同じく島々が多く描かれ、かつ、島名もつけられている例を見出すことができるが、それらのほとんどは地図Aを祖形としたものと判断できる（1999年）。以上のように、地図Aとその系統の地図は例外的とも言える熱心さで朝鮮半島を囲む島々に島名をつけて描くことで、海の彼方にも大きな関心のあることを表現したのである。

そのなかでも、咸鏡道およびそれを越えた海域にまで、境界的な表現もなく、連続的に島々を描き、かつ島名まであるのは、この地図のもっとも目立つ特徴である。島数が『新增東国輿地勝覧』に記載されたそれより多いということは驚くべきことで、この地域について広い関心のあった時代の反映であろう。それはいつの頃なのであろうか。

やはり、同じく朝鮮半島を中心に描いた地図を地図集で見ると、それらのほとんどは豆満江を越えると地名がなくなる。あるいは地形すらなくなる。朝鮮後期の地図になると、鴨緑江、豆満江以北に明確な境界があるかのような描写が目立ってくる。さらに、1712年に白頭山定界碑が建てられ、朝鮮と清との境界が明確にされると、地図にも定界碑が描かれるようになり、さらに境界は明確になる（文純実、2002年）。言い換えれば、地図Aのように、朝鮮の北の境界についての描き方がそれほど明確ではなく、かつ、関心もあるという時代は朝鮮前期が該当し、さらに朝鮮の北方政策の推移を見ることで、より狭い範囲に収斂することができるのではないだろうか。

ところで、咸鏡道という地域の名称はしばしば変わっている。まず、1413年（太宗13）に永吉道が設置され、1416年に咸吉道と名前を変えた。1470年（成宗1）に永安道になり、1498年（燕山君4）によりやく咸鏡道に落ち着くのである。したがって、ここで検討する時代はほとんど咸吉道である。

河内良弘は、朝鮮政府の朝鮮東北境、すなわち咸吉道およびそれを越えた地域に対する政策や活動について詳しく検討している（1992年）。それによれば、咸吉道を管轄下に置こうとする過程で、当然ながら、朝鮮側はそこに居住していた女真人と接触するようになる。なかには朝鮮の秩序に従属する勢力もあったが、有力な勢力は明とも関係を結ぶなどして政治的に複雑な状況をつくりだしたり、反乱を

起こしたり、朝鮮の秩序には容易に従おうとはしなかった。そのため、朝鮮政府の方針は武力行使と懐柔のあいだで揺れ動いた。

その過程は複雑で簡単には要約できないが、太宗の時代から世宗の時代、すなわち15世紀の前半までは、ほぼ咸吉道内の女真人対策、あるいは道界の外からやってくる女真人との関係に終始している。その状況が変わるのは世宗が死去し、朝鮮の政治の主導権をめぐる闘争が激化する15世紀半ばからである。とくに世祖の治世を中心として、豆満江を越えて積極的に女真人を統制しようとする政策が実施されるようになる。そのような具体例を二つ紹介する。

第1は、このあたりを現地調査した例である。クーデターによって世祖になる直前の首陽大君柔(玉偏)は、1455年、咸吉道都体察使李思哲に北方地域についての現地調査を命じた(『朝鮮王朝実録』端宗3年3月己巳)。内容は女真人の勢力についての詳細な記述が中心で、地理的な記述はわずかしかなかく、地図Aとの関連は伺えない。ただし、豆満江の対岸を拠点とする勢力についても記述があるのは地図Aと関心のありかたは共通している。

第2は、1460年(世祖6)、咸吉道都体察使申叔舟によって実施された軍事行動である。世祖は道外も含めて反抗する女真人を申叔舟に命じた。申叔舟は、約8000人の騎兵・歩兵を率いて、咸吉道の女真人を制圧しただけでなく、豆満江を越えて女真人居住地域を攻撃した。この軍事行動自体は地図Aの内容と合致しないが、豆満江を越えての関心をこの軍事行動も示している。

以上の例だけでは十分ではないが、河内の研究を見る限り、地図Aにおいて、咸鏡道周辺に多くの島々が描かれた背景として、もっとも適合的なのは世祖の治世を中心とした時期ではないだろうか。他の島々についても検討する必要があるが、現時点では情報源についての推測もできなかった。また、地図Aの原図についての検討もできなかった。こちらについては、世宗の治世に作成されたと言われている鄭陟の「八道図」、同じく梁誠之の「八道図」、世祖の治世に両者で作成したと言われている「東国地図」などの有力候補があり、検討の余地がある。

<参考文献>

青山定雄「李朝における二三の朝鮮全図について」東方文化学院『東方学報 東京』第9冊、1939年1月。

李相泰(イサンテ)母岳実学会叢書第9輯『韓国古地図発達史』ヒィエアン、1999年3月。韓国語。

李相泰(イサンテ)「朝鮮初期に制作された『八道地図』に関する研究」母岳実学会『実学思想研究』17・18合輯、2000年12月。韓国語。

李燦(イチャン)『韓国の古地図』汎友社、1991年。韓国語。

長正統「内閣文庫所蔵『朝鮮絵図』およびその諸本についての研究」九州大学文学部『史淵』119輯、1982年3月。

河内良弘『明代女真史の研究』同朋舎、1992年。

京城帝国大学『朝鮮古地図展観目録』1932年。

高橋公明「海域世界の交流と境界人」大石直正・高良倉吉・高橋公明『日本の歴史14 周縁から見た中世日本』講談社、2001年。

高橋公明「テキストとしての済州島地図」研究代表者荒野泰典『グローバリゼーションの歴史的前提に関する学際的研究』(平成12年度—平成14年度科学研究費補助金・基盤研究(A)(2)研究成果

報告書)、2003年8月。

鶴田啓「釜山倭館」荒野泰典編『日本の時代史14 江戸幕府と東アジア』吉川弘文館、2003年。

文純実「白頭山定界碑と十八世紀朝鮮の疆域観」朝鮮史研究会『朝鮮史研究会論文集』40号、緑蔭書房、2002年10月。

Gari Ledyard, "Cartography in Korea" in J. B. Harley & David Woodward (ed.), *The History of Cartography, Volume Two, Book Two, Cartography in the Traditional East and Southeast Asian Societies*, The University of Chicago Press, Chicago & London, 1994.